

感覚環境のまちづくりシンポジウム（平成 20 年 12 月 9 日）

「音環境の面からのまちづくり」

財団法人小林理学研究所理事長 山下充康氏

あいにくのお天気の中をようこそお越しいただきまして、ありがとうございました。また、環境副大臣もお見えいただいて、立派なごあいさつを頂戴し、ありがとうございました。

私は本日、「音環境の面からのまちづくり」ということでまじめな話をしなければいけないのですけれども、話が脱線するかも知れませんが、20 分だけお付き合い下さい。

私は、音響学ということで、初めはこういったコンサートホールの中で隅々まで音がうまく伝わるにはどうしたらいいか、音をどういうふうに遠くまで正確に届かせるかなんていうことを研究していたんですよ。ところが、最近は、騒音ということで、先ほどからいろんな方のお話にありました感性に訴えてくる騒音という、敵に回る側の音の話になってまいりました。

まず、スライドに書きましたように、「すべての音は騒音になり得る」ということ。どんな音でもです。音楽でも騒音になる。カラオケなんて嫌ですね、おじさんたちが「うまいよ」とか言って手をたたくんですけれども、僕は嫌いですね、あれ。それで、大体、人を誉めておいて、自分にマイクロフォンが回ってくるのを待っている人が多いですね。

そして、音はすべからず謙虚であるのが望ましい、つまり、謙虚でなければいけないということが1つあります。

本日お見えの方々にも行政に携わっている方が多いようですけれども、つまり騒音、騒音と邪魔にしているけれども、結局、謙虚であることが大事なんじゃないかなと。

どんな音でも騒音になる、つまり、騒音なんてごみみたいなもので、どうしても出ちゃうんですね。

ちょっと話を戻します。私はもう 70 歳を超えましたけれども、耳が聞こえなくなっています。耳が聞こえないというか、音が聞こえなくなっています。静かです、世の中が。そのかわり、人に話しかけられても、そっちの方に目が行かない。失礼なや

つだ、嫌なおじんだという専らの評判でございます。70歳を超えると聴力がダウンしてくる。これが果たしていいのかと言うと、最近、「ALWAYS 三丁目の夕日」という映画がヒットしました。あれは東京タワーができる頃の東京を描いていますね。あの頃の音というのはどうであったかというのをちょっと考えてみてください。テレビなんていうのは、街頭テレビです。1家に1台あるかどうか。今はもう1人1台、何か電話でテレビを見ている人がいますでしょう。音文化というのが支配していた時代がああ時代ではなかったかと思うんです。

更に遡りますと、終戦直後、渋谷の駅前にハチ公という犬が飾ってありました。あれは移動して今のところに来ているんですね。交番の前も大きなスピーカーが電信柱の上に飾ってあって、大きな音で「何とか大売り出し」とか、やたら叫んでいました。街頭放送ですね。

それで、ああいったものに対して音の規制をしようじゃないかと考えたのが当時の厚生省です。それが環境庁になって、今は環境省になってまいりましたけれども、音が氾濫していた戦後という時代がありました。東京中、鉄の車輪を履いた鉄のレールの上を木の箱をぶら下げてガラガラ走っていた都電、あれも何しろうるさかったんですよ。ところが、三丁目の夕日だと、いいねということなんですね。

NHKでこの間、あるアンケートをとりました。あの音をもう一度とか、懐かしいあの音を聞きたいとか。そうしますと、なぜかSLがトップなんですね。SLというのは、スチームロコモティブですよ、蒸気機関車。大気汚染はひどいし、騒音・振動が激しいという、すごいものがトップなんです。ノスタルジーというのは怖いんですね。

私、環境庁と一緒に仕事をさせていただいた時に、「残したい日本の音風景100選」というのをやりました。それがトップに入っているんですよ、津和野と山口の間を走っているSLがありますでしょう、それから大井川鉄道のSL、うるさいんです。エア・ポリューションもひどいです。だから、あんなものがトップになるという感性がよくわからないんですけれども、やはり昔の日本、我々が体験して育ってきた時代の音というのは、ラジオ文化というのがありましたね。ラジオ文化というのはいいですよ。あの声で、自分の理想的な女性なり男性なりを思い描いちゃうんです。宮本武蔵なんて、べらぼうにハンサムで、べらぼうに格好いいんですよ。テレビじゃそうはいかないですね。薄汚いのが出てきます。宮本武蔵をNHKでやったとき、お通なんて

私のイメージと全然違っていましたよ、あれ。そういうことがありますでしょう。

テレビというのは、どうもイメージを拘束してしまう。漫画家がそんなことを言っていましたね。信長をどういう顔にしたらいいんだなんて、そんなもの知るかというようなもんですね。

音文化というので日本はずっと参りました。音というものに対して、音環境、まちづくりの中の音というのを大変大事に扱って来られたし、注目を集めていたわけです。視野の中心にとらえて、音・騒音というものを環境の要素としてとらえていました。

ただし、音によって断絶された世界というのが少なくはなくなってきましたね。今、大事な音が聞こえなくなってきた時代です。糸電話は滅びました。糸電話というのは、かすかな音を聞いていたから面白かったんです、我々の小さいときは。今は、「おーい」と言えば、直接聞こえるじゃないかということで、こんなことで「もしもし」なんてやっても、面白くも何ともないです。

猫の鈴なんてのもありますね。猫なんていうのは、あれ、どこにいるかわからないんです、音がしないですから。「ミャー」なんて言っても、たんすの上で丸くなっている。だから、鈴をつけたわけでしょう。皆さんもお財布に鈴をつけて、落としたりすぐに拾えるようにスタンバイしておられる方がおられるでしょう。ところが、今、雑踏の中で鈴を落としても聞こえないですよ。かすかな音が聞こえなくなってくる時代になってきた。

それで、いい時代というのはどういうことなのかと言ったら、むだな音を減らそうじゃないかと。猫が鈴をつけている。東京駅に銀の鈴なんてでっかい鈴がありますでしょう。あのぐらいでかくしなければ、音が聞こえない時代になりましたね。それはどうでもいいですけども。

どうも、猫の鈴なんていうのは、犬なんていうのは隅にいればわかるじゃないですか、ガチャガチャうるさいですから、あれ。爪は出しっ放しだし、歩けばカチャカチャカチャカチャ言って歩きますし、うちのジョンはどこだと言うと、戸の向こうにいるよとすぐわかるんです。猫はいてもわからない。

それが、電気自動車とか、皆様ご存じのハイブリッドカーなんて、怖いことありませんか。足音もなく忍び寄ってくるんですよ。おお、ここにいたかなんて、ありますね。私の時々行っているゴルフ場で、カートが電気自動車なんですよ。静かですね。静かなのはいいんですけども、危ないですよ、突然やってくるから。それで、しよ

うがないんで、カウベルみたいな鈴をつけてカランカランやってきます。何が騒音対策なのかわからんですな、あれ。

これ、面白い絵でしょう。片一方が大声で泣いているんですよ、片一方が耳をふさいでいるんです。音というものは、五感の中でも出せて聞けるただ一つのものですね。

臭気、フレグランスと言いましたか、臭気なんていうのは、そんな体臭のひどいの、口臭のひどいのなんているかもしれないけれども、自分じゃ出さないですよ。おならをすれば別ですよ、臭いなど。

だけど、音というのは、普通に出せるでしょう、そして耳で聞けるでしょう。出せて聞けるという要素、感覚要素としてはすばらしいものがあるんじゃないかと思って、こんな写真を支度しました。

これ、「タイムライフ」という面白い写真雑誌があったんですよ、USAの。その中の写真で、これは面白いなと思ってとっておいたんですけれども、今日はその話はやめておきましょう。

ちょっと、昔のことを思い出してください。「音と遊び」、さっき糸電話の話をしましたけれども、音の出るものでないと子供たちは喜びません。おもちゃ売り場へ行くと、うるさいですね。やたらうるさいです。また、うるさくないと子供たちは買わないんですよ。その音と遊びについて分類してみたのがこのスライドです。楽器的なもの、擬音的なもの、鳩笛とか鶯笛なんてありますけれども、擬音ですね。それから、意外性にびっくりするもの。

あのピヨちゃんサンダルなんてものがありますけれども、あれ、他人の子供だったらうるさいですね。ピヨピヨピヨピヨ言って駆け回るの。ふだん狭いところにいるもんだから、広いところに来ると、ピヨちゃんサンダルで駆け回る子供がいますね。

音の出るものとしていろいろあります。それがおもちゃになります。めんこ、これはパチンという、あの音が楽しくて遊んだものです。これを騒音に入れちゃうと面白くないですね、音もなくめんこなんていうのは。ふわっと地面にというのはおかしいでしょう、そんな風景、考えてみてください。

やっぱり、音が出るから面白いんです。花火も「たまや〜」とドンといくから、あれは面白いんで、あれ、音がなかったら面白くないでしょうね。

この間、仕事で付き合ってるフランス人をそば屋に連れていったんですけれども、そうしたら、おそばを吸えないんですよ。もごもご嚙んでいる。もうイライラしたで

すね。おそばというのはツルツルというのがいいでしょう、皆さんも恐らく、お上品な方でも。お茶漬けだって、音がするからいいですよ。何か、お茶漬けばかり食べている相撲取りがいるじゃないですか、大して強くないけれど。あれだって、サラサラといくからおいしいんでしょう。音というのは、そういうふうに補助的に結構我々の周りに大事な役目を果たしている訳ですよ。

それから、「宗教における音」とか「音霊（おとだま）」とか「釜鳴りの神事」とかいろんなもの、時間があつたらこのような話も色々させていただきたいんですが、今日はやめます。

生まれたときも音で生まれて、結婚するときも音で結婚して、死ぬときも音です。何か知らんけれども「ボーン」とやりますよ。木魚をたたいてみたり、鐘をたたいてみたり。

その下に、天忍穂耳尊（アマノオシホミミノミコト）なんて書いてあるのは、日本神話に出てきますね。天照大神（アマテラスオオミカミ）がいるでしょう、あれの子供だったですかね。

ここに耳が登場してきます。老子なんていうのは、中国の有名な人ですけども、字名が耳だそうですよ。やっぱり、耳というのは昔から大事な要素であつたらしい。

ちょっと話が飛びまして、突然浮世絵が出てきたですけども、これ、私がちょっと興味を持ってある本を書いた、余り売れないですけども、「音戯話（おとぎばなし）」という本があるんです、「音響額（おんきょうがく）」だったかな、忘れちゃった。

街道版画というのがべらぼうに受けた時期があるんですね。この当時、庶民の周辺には旅はないわけですよ。もう、のり屋の婆さんの話から始まって、横丁のご隠居の話で終わっちゃう訳でしょう。その向こうにある世界というのは知らなかった。そこへ持ってきて、十返舎一九なんていうのが『東海道中膝栗毛』を書いた。ばかに売れた。みんな見た。そして、間宮林蔵なんていうのは「樺太」とかというところを探検したんだそうで、日本に樺太というところがあるそうだとか、伊能忠敬が日本地図を作ったなんていうことがありますでしょう。

そうすると、俺達の知らないところに何か世界が広がっているんだよなんて、長屋のおやじが気がつく訳ですよ。そこに当て込んで、それまで美人画ですとか役者絵を描いていた浮世絵師が街道版画というのを描き始め、これがめちゃくちゃ売れるわけ

です。

なぜ、売れたか。どの絵を見ても、必ず音が描き込まれています。何枚か見れば、そうですよ。雨が蓑を打っている音でしょう、旅に出ればこんな音が聞こえると思いますよ。霧の中を歩いている旅人、霧の中というのはすぐそばで音が聞こえるような雰囲気、これは描き込んでいますね。これは広重ですね。英泉とか北斎もあります。これは隅田川、やっぱり雨の音。

そんなこんなで、この日本列島にほくらみみたいなのがついているのが、残したい「日本の音風景 100 選」の分布です。「日本の音風景 100 選」と言いましたけれども、「音風景」なんですね。間違っって「音」100 選なんて言う人がいますけれども。これを発表したときに、ラジオで放送しているんですよ。「琴ヶ浜の鳴き砂」というのがどこかに入っています。「鳴き砂の音です」なんてラジオで放送しても、面白くも何ともないですよ。オットセイの遠ぼえみみたいな感じ、「アウ、アウ、アウ」、鳴き砂ですと。これは面白くないですよ。

その風景があつて、音なんです。それをちょっと考えてみようということを当時の環境庁にも申し上げました。音というのは、風景とリンクしているんです。

「オホーツク海の流氷」、これは流氷がせめぎ合う音がオホーツクのまちに満ちあふれる訳です。これが音風景としていいじゃないかと入れたんです。北のはずれです。ところが、ラジオで放送すると、単なる歯ぎしり、「ギーギーギー、ギーギーギー」、何が面白いのかと。これは風景があつて面白いんです。

これは鹿児島県の出水市ですが、ナベヅルというのが渡りで飛んできます。それで、カウカウ、カウカウ鳴くんですよ。それが音風景になるということで入れました。

整理してみますと、鳥の声とか昆虫の声とか、祭りの音とか文化とおつき合いしている音というのもありますけれども、日本人の好きな音というのは、大体、こんなもんなんですかね。セミが鳴いて「しずけさや」ですからね、日本人というのは面白いですね。そこら中でセミが鳴いたら環境基準をオーバーしますよ。「しずけさや」と言っていますけれども。

これを英語で発表したんですね。結局、世界中の人たちはわかってくれなかった。

「A frog」、1匹のカエルが。「jumped into」、「the old pond」。ハハハでしょう。何だそれと、ぽかんとしているんですよ。カエルが飛び込む水の音が聞こえてきた、そのしずけさというのが大事なんだよというのが西洋人は理解されないんです

ね。1匹のカエルが古い池に飛び込んだんだよ、それがどうしたと。これは説明するのに困ったですね。

さて、騒音の測定なんていうことをやりながら私達は生活しています。騒音の測定、何のために測定するのか。また、話が長くなりますけれども、大切なことは厳密な音の大きさではないんです。

これは昔の海軍の資料、また古いですが、階級というのをつけたんですよ。「無音」から始まって「轟音」、とどろく音まで。0から6までの7段階評価ですね。この程度でいいんじゃないかと。やや大きいとか、このくらいはペケぐらいに考えて音とつき合っていただくくらいがちょうどよいのではないかと考えています。

最後のまとめですが、静けさというのにはあるはずですよ。静けさの対面ににぎわいというのがあります。まちというのにはにぎわってはいなくてはなりません。にぎわいと静けさというの、対比していますね。一方で、静けさというのには寂しさです。にぎわいというのにはやかましさです。やかましさというの、猫の鈴だって聞こえないし、大事な音が聞こえないのがやかましさです。こうなっちゃいけないよと。

私の提案としては、東京都の委員会の方でもお話ししていることなんですけれども、特区という言葉があるんです、特別な区域。これをつくってみるのも一つのアイデアじゃないかなと私は思っているんです。騒音特区、静けさ特区。にぎわい結構だ、竹下通りでワーワーやるのは結構じゃないかと、やってくれと。そのかわり、東郷神社に行くと静かだよと。そういう特区があつて初めて、まちの静けさ、にぎわいというのが評価されるんじゃないかと思っているんです。終わります。